

安曇野さんさん通信 第24号

～長野県議会議員小林陽子活動レポート～ 2024(令和6)年1月15日発行

2024年新年明けましておめでとうございます。元日の夕方激震が走りました。能登半島地震で亡くなられた方、被災された方に謹んでご冥福とお見舞い申し上げます。一日も早い復旧復興を願います。

さて、今年は辰年です。鯉が滝を登って龍になった故事にあやかり、社会が元気を増していくような1年になればと思います。皆さま、お一人おひとりのご健勝とご多幸をお祈りいたします。



「活動報告」～県議会農政林務委員会での質疑～

【穀類生産振興施設の整備について】

11月補正予算の3億400万円はどのような事業内容か。

(農政) 地域農業再生協議会が主体となり、米粉製品製造施設及び加工機械整備一式を導入する際に、国の「産地パワーアップ事業」を利用し事業費の1/2を補助する。令和6年度に着手、国内需要が減少している米を米粉にして需要創出し、米産地の生産維持と体質強化を図る。

【物流2024年問題について】

農産物を首都圏や関西圏などに大量に輸送している本県では、物流2024年問題は深刻であるが、どのように対策を考えているか。IT化やデジタル化による省コスト構造の推進について、見解を伺う。

(農政) 県は長野県トラック協会や商工会議所連合会などと2024年問題への共同宣言を行った。県内の農産物物流は、ほぼ100%トラック輸送であり、2024年に2019年比32.5%不足する見込みで影響が大きい。ドライバー待ち時間の短縮、荷積みの共通パレット化など対策検討している。IT関連企業から産地のDX化提案もあるので、ぜひ進めたい。

【米の有機農業について】

国のみどりの食料システム戦略では2050年有機農業の耕作面積を25%にする目標。達成には米の有機農業の推進も必要と考えるが研究や計画はどうか。

(農政) 県内の有機農業の耕作面積のうち米は35%で、野菜の42%に次ぐ。米の有機栽培推進では雑草防除が課題で、昔からの合鴨、除草機械やスマート技術など活用し対策する。種もみ湯せん消毒やカメムシ対策などの研究・普及も推進する。

【循環型農業に欠かせない堆肥について】

農業資材や化学肥料の高騰で、緑肥や堆肥が注目されている。畜産や食物残渣からの堆肥づくりについて見解を伺う。

(農政) 非常に重要で、県知事が特殊堆肥として認定している。「みどりの食料システム戦略」に沿って、地域内循環の推進を県も支援する。

【未利用材等活用システム構築事業について】

伐採後に林地に残る未利用材を活用するサプライチェーン構築費用として、6,050万円が補正予算に計上された。未利用材は、かさばるため搬送効率性が低いと聞かすが、事業化が可能か。

(林務) 未利用材を活用した商品化を考えている事業者がある。山からの木材搬出に県も技術的な支援等を行う。

【公共治山事業の入札不落について】

公共治山事業のうち3件(上伊那1件、松本2件)が入札不落で、次年度繰越となっているが、原因と今後の見通しは。

(林務) 原因は、応札なしと価格超過で、本年5月から7月の豪雨災害の復旧工事を優先させたこと、山間地で条件が厳しいことが原因。入札しやすいよう発注ロットを大きくしたり、早期発注や単価を考慮した条件など対策する。

【鳥獣害対策について】

今年はツキノワグマの被害が多かった。被害軽減のため、ボランティア団体が河川敷の樹木を伐採しているが、大量に出る細かな枝葉の処分などの県として支援できないか。

(林務) 森林づくり県民税を活用した里山整備利用事業や国の交付金のメニュー等がある。現場でチップにして土に戻す方法もあり、チップの借上げ代や購入費の支援メニューもあるので、地域振興局に相談していただきたい。

「安曇野、よいまちつくろう」
～ 安曇野を深掘りし、発信します ～

豊科の新春初市「あめ市」

1月6～8日、豊科新田区・成相区であめ市が行われました。五穀豊穰、無病息災、商売繁盛を願い、伝統行事の「福俵曳き」は、安曇野市の無形民俗文化財に指定されています。福俵づくりは前年11月から始まり、伝統の編み方による大小の福俵は、縁起物の巾着や色紙の柳花とともに御柱に取り付けられ祀られます。最終日、神事のあとに御柱から降ろされた大きい福俵を若衆が曳き回します。若衆が重い福俵を軽々と曳いて走る姿は活気があふれ、住民が福を引き入れるため、若衆と福俵の綱を引き合う場面は、大いに盛り上がりました。小中学生のお囃子も鳴り響き、祭りを彩りました。

世代を超えて、地域の方が一体感をもてるお祭りは、子どもたちにとっても、よい思い出になるでしょう。最近子どもたちが忙しく、参加が少なくなっているとのこと。時代の流れと思いつつも、伝統のお祭りを地域の宝として楽しみながら、次の世代へと引き継いでいってもらえたら、と感じました。



「ねろ、ねろ」のかけ声で福俵を空中に持ち上げる